
とある話

S A I

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある話

【コード】
N9791J

【作者名】
SAI

【あらすじ】
カップリングは上条×○○です。○○は読んでからのお楽しみです！

前編

私の名前は佐天涙子。今日は初春に慰めてもらっちゃおうかなって思ってます。何でかって？まあ、悩み多き乙女の宿命ってやつですよ。

一ヶ月前。

御坂・黒子・佐天・初春の四人はいつものようにお茶をしていた。次の行き先を考えていると、初春がデパ地下に出来たスイーツのお店に行きたいと提案した。

「今お茶したばっかじゃん？」

「でも、そのチーズケーキが凄く美味しいって評判なんですよ！」

佐天は甘党の親友を呆れ顔で見ている。

「でも、私も雑誌で見ただけど確かに美味しそうだったわね」

「お姉様だったら…またコンビニで立ち読みですか？」

黒子の言葉に別にいいでしょう？と御坂は横目で黒子を見る。結局四人はデパ地下を指すことにした。

「楽しみですね！御坂さん！」

「ええ。どれほどのチーズケーキが見定めてやりましょう？」

和気藹々と歩こうとした矢先、御坂の足が止まった。三人が御坂の様子を伺うといきなり…

「なんでこのタイミングで現れるのよ！！」

もの凄い剣幕で怒鳴り始めた。三人はおろか周りの人も何事かと御坂に注目していた。

「あー！ー！！貴方はいつぞやベンチにてお姉様と密会していた殿方！？？」

黒子は目の前を指差しながらそう叫んだ。佐天は黒子の指す方を見ると、ツンツン頭の男子生徒が驚いた表情でこっちを見ていた。

「まさか！今日もこの後、お二人で密会する予定ですよ！？前にも申し上げましたが、お姉様をたぶらかすというなら、この黒子に断りを入れて下さいまし？」

「そんなわけないでしょう！！」

黒子の言葉に御坂は顔を真っ赤にさせて否定した。そんなやり取りを見ていた少年が口にした言葉は、

「はあ、何とというか…不幸だ」

「あんたも第一声はそれか！！」

御坂の矛先は再び少年に向けられた。

「あのなビリビリ？店の前を通り掛かっただけで、何でこのタイミングに現れるか！って怒鳴られたんだぜ？」

「うっ…」

「それにこのタイミングがダメならどのタイミングならいいんだ？」

少年の言葉に御坂は少し怯んだが、

「い、いま会ったって決着つけられないじゃない！」

その言葉に少年はため息を吐いた。

「なら今日はもういいな？友達もいるみたいだし」

そう言って少年は行こうとしたが最後に余計なことを言ってしまった。

「それにしても。お茶して尚スイーツなんて、カロリー取り過ぎじゃないか？」

少年は体に悪いと言ったつもりだったが、とらえかた次第では『太るぞ』と聞こえる。当然は後者のとらえかたをした御坂は、

「よ、よけいなお世話だコンチクショーー！！！」

そう言つて少年に電撃を放つた。少年はヒイイ！と言つて走り去つて行つた。その時、佐天は見ていた。LEVEL5の攻撃を喰らつた少年が無傷だったことに。

（つたく…余計なことは言つは、人のことビリビリ扱ひするは…私は御坂美琴だつて何回言えばわかんよ！…………あのバカ）

そんなことをぶつぶつ呟いていた御坂はチーズケーキを食べなかつたらしい。

数日後。佐天は買い物物の袋を両手にフラフラと歩いていた。

（あーもう、安いからつて買い過ぎたかも）

袋には醤油、味醂、味噌等調味料関係があつた。さらに卵を2パックも買ってしまい、体力も神経も限界だつた。

「あれ？お前この間御坂と一緒にいた子か？」

声のした方を見ると、そこにはいつぞやの少年がいた。

「あ、あの時の…」

「…ずいぶんと買い込んだな」

少年は佐天の荷物を見てそう呟いた。佐天は、あははと曖昧な笑みを見せた。

「袋一つ持ってやるよ」

「え？いや、いいですよ！」

「そんな腕プルプルさせながら言われてもな？」

実は重い物を一つの袋にまとめてしまい、片手が限界だった。両手持ちだと卵に危機が生じるので仕方なかった。

「あはは…実は右腕が限界だったりして…」

「…たく…貸してみ？」

そう言っただけ少年は重たい袋を手を取った。佐天は軽い袋と変えようとしたが、少年の男気がそれを許さなかった。

「あの、お名前聞いてもいいですか？私、佐天涙子といいます」

「ああ、そういえばまだだったな。上条当麻だ。よろしくな佐天」

「あ、こちらこそ。上条さんは今日はどちらに？」

「ああ。実は上条さんは卵狙いで買い物にきたのですが、財布を忘れるということにレジで気付いて半ベソ状態で帰宅途中なのでした」

上条の喋り方に佐天は思わず笑ってしまった。そんな佐天を見て上条は、

「佐天は笑顔が似合うな」

「え？」

「なんつーか、可愛い中に綺麗って表現も入ってる感じ？」

そんなことを異性に面と向かって言われた佐天は、顔を赤くして否定した。そんなこんなで佐天の部屋に着いた。

「本当にありがとうございます。お陰で助かりました！」

「いやいや、これしきのこと何でもないさ」

それじゃあと帰る上条を佐天は引き止めた。

「あ、待って下さい！良かったらこれどうぞ」

そう言って佐天は卵を上条に差し出した。上条としては嬉しい申し出ではあったが、それを断った。しかし佐天も引かなかった。

「私も勢いで2パック買ったけど、賞味期限前に使い切れるか微妙なのでもらっちゃって下さい！」

「…本当にいいのか？」

佐天が笑顔で頷くと、上条は佐天の両手を掴んだ。一瞬ドキドキした佐天だったが、上条が涙を流してお礼を言ってくるので少し困った。

(インデックスに頭噛み付かなくて済みそうだ〜〜!!)

(泣くほど嬉しい…ってことでいいのかな?)

そんな二人は携帯番号とアドレスを交換した。上条が是非お礼がしたいとのことだ。

「本当にありがとうな！佐天から卵をもらった私は幸せ者です！」

そう言って上条は軽い足取りで帰って行った。

買い物片付けた佐天は携帯を開いていた。見ていたのは上条の連絡先だった。あんなに嬉しそうな上条を思い出して笑っていた。

(私が使い切れないから上げた卵くらいであそこまでですか?)

そんなことを思っていると、ふと疑問が浮かんだ。

(…私が上げたから？……………ワタシカラモラッタカラ？)

数秒停止した後、佐天は布団にダイブした。

「そんなわけないでしょ！！何言ってるんの私！？」

そんな感じで上条と佐天は出会った。

中編

佐天と初春は学校が終わったら御坂と黒子と会う約束をしていた。トイレの鏡を見て佐天は昨日の上条の言葉を思い出し、笑ってみた。

「どうかしたんですか？佐天さん？」

「な、なんでもない！なんでもない！」

あははと空笑いする佐天に初春は首を傾げる。その後、四人で行動していると話題は御坂の話になっていた。

「お姉様ったら最近ダイエットなんかなさってるのですよ？」

「そんなんじゃないって言ってるでしょうー！」

「それにしてもスイーツ類を最近召し上がってはいないんじゃないかと？」

御坂は気のせいだと言った。しかし黒子もしつこかった。

「まさかとは思いますが、あの殿方の言葉を気になさっているわけじゃありませんよね？」

「なっ、なに言ってるのよ！そんなわけないじゃない！大体なんであのバカが出てくるのよ！」

顔を真つ赤にして否定する御坂を見て黒子はやや呆れ、くるりと背を向けると鬼の形相で呟いていた。

「あの類人猿が…次会った時にどうしくれましようか？」

そして、佐天は違うことを考えていた。

(御坂さん…まさか上条さんのこと…)

それがどうしたといえば、どうということはない。佐天はいまいち自分の気持ちに整理がついていなかった。すると初春が、

「あれ？噂をすればあの人って…」

え？と三人が前を見ると、そこには上条当麻が歩いていた。向こうもこちらに気付くと、柔らかな笑みを浮かべてこちらに駆け寄ってきた。

そんな上条にドキッとしたのが佐天で、鬼の形相になったのが黒子。ドキドキしていたのが御坂だった。

「よう佐天！」

その言葉にそれぞれの反応を示し、三人は佐天を見た。予想外な出来事に佐天は混乱したが取りあえず挨拶をした。

「こ、こんにちは」

「昨日はマジでありがとうな！お蔭さまで上条さんは延命出来ました！」

「あはは。そんな大袈裟な。こちらこそありがとうございます」

そんな二人を御坂は無言で見ている。

(佐天さんとコイツ：知り合いだったの?)

二、三話した後上条は歩いていった。その後、初春が最初に切り出した。

「佐天さん。あの人と知り合いだったんですか？」

「違う違う！昨日たまたま会って荷物持つの手伝ってもらったの」

「それでどうして佐天さんがお礼を言われるんですか？」

佐天が卵の件を話すと黒子が話しをまとめた。

「要するに女たらしですね」

「いや、上条さんは良い人なんですよ」

その夜。御坂は布団に包まっていた。

(佐天さんはいい子だし、見た目だって可愛いから声かけたくなるわよね。だからって私のこと無視ってどうよ？知らない中じゃあるまいし…)

上条が自分を無視して佐天に話しかけたこと。その時の上条が優しい笑みを浮かべていたこと。佐天と仲良く見えたこと。全てのこととが御坂にとつて面白くなかった。なんでこんな気持ちになるのか。御坂はその答えを知っていた。だがそれを認められないでいた。そんな自分、問題の上条、佐天の存在。そんなことを考えてため息を一つ吐いた。そんな様子を黒子は見ていることしか出来なかった。

佐天は一人で帰っていた。初春はジャッジメントの仕事に行ってしまった。すると、曲がり角から上条が出てきた。佐天は思わず上条を呼んでしまった。

「上条さん！」

「ん？おお、佐天！」

奇遇ですねと駆け寄ろうとしたが、後ろで金髪グラスンと青髪の男二人が殺意をあらわにしていた。

「にゃ〜、上ちゃん？どっから説明してくれるにゃ？」

「せやで上ちゃん？結果は変わらんが一応言ってみん？」

そんな二人に上条は慌てて弁解した。

「ま、まてまて！佐天とはお互いを助け合った中であって、決してやましいことなど…」

しかし、上条の不幸は不幸を呼ぶに過ぎなかった。

「委員長！上条君が女子中学生をたぶらかしております！」

そこに現れたのは、怒りで手が震えている吹寄だった。

「上条当麻…あんたって奴は…」

「吹寄さん！？いったいどか…」

上条の言葉は吹寄の頭突きによって強制終了させられた。その後、青髪に間接技を決められている上条を見て、佐天はどうしようかとおろおろしていた。

「彼女は上やんが今口説いてる女なんにゃー」

え！？つと佐天は金髪を見た。上条が後から、嘘だー！と叫んでいたが金髪は続けた。

「だが状況は良くないにゃー。そこで上やんは手当たり次第に女に声かけてるんだにゃー」

「そんな…まさか」

そこで金髪はニヤリと笑い、嘘だと思うならついて来いと言った。

上条・金髪・佐天の三人（青髪は疲れたという理由で帰った）は、上条の部屋まで来ていた。途中で上条と金髪が揉めていたが佐天はこれから起こることに気がいつていた為、会話は全く聞こえていなかった。

（上条さんが…まさか…）

先日の黒子、先程の金髪の台詞が誤解だと信じた佐天だったが…。

御坂と黒子は部屋にいた。御坂はずっと元気がなかった。

「そういえば佐天さんとあの殿方。ずいぶんと親密そうでしたけど、お付き合いなさっているんですかね？」

その言葉に御坂は肩をビクッと震わせた。しかし、それ以外にアクシヨンを取ってこなかった。その様子に黒子は、

「お姉様？もっと素直になられてはいかがですか？」

「な、なによ。急に」

御坂の反応に黒子は続けた。

「黒子にはわかっておりますわ。お姉様が何に悩んでいるのか…お姉様はそのことにご自分で気づかないふりをしていることも」

「…」

「黒子は自分に正直に生きてますの。なので自分勝手なことを言いますわね」

そこで黒子は一呼吸おいて話した。

「私はお姉様が誰かとお付き合いすることは望みません。ですが、そのことでお姉様が悲しい思いをするというのなら、黒子はお姉様の背中を押しますわ」

「黒子…」

「そのような表情はお姉様には似合いませんわ。最強レールガンは毅然とした姿でもらいませんか！」

後輩の言葉に御坂は数秒目を閉じた。そして目を開けた時にはいつも御坂美琴がそこにいた。

「ありがとう。黒子」

そんな御坂を見て黒子は微笑んだ。

佐天は部屋にいた。携帯をにぎりしめたまま、膝に顔を埋めていた。外は雨が降っていた。そんな外から傘も差ささずに佐天の部屋を見つめている少年がいた。佐天の携帯には上条からのメールが開かれていた。

『話がしたい』

後編（前書き）

短編予定が急遽三部作になりました。文字を打ちながら文章を考えると、即興作品になりました。イメージも固まっていなかったの
で、自分で読み直すのが怖いです…

後編

上条の部屋を開けるとそこには修道服の少女がいた。話を聞けば二人は同棲しているという。

すると後からポニーテールでスタイル抜群の美女が立っていた。金髪は上条に墮天使メイドのコスプレを見せにきたと言った。

すると今度は巫女さんが鍋を持って上条の部屋にきた。そんな状況に佐天はそこから逃げ出した。

佐天は上条の寮の前で女性とすれ違っていた。上条は後ろから追いかけたが、階段で足を滑らせて派手に落ちた。

佐天は派手な音がしたので振り返ってみると、先程すれ違った女性に介護されていた。頭を女性の膝に乗せ、女性がカバンから何かを取り出そうとしていた。その様子に佐天は再び走り出した。

佐天は上条の存在には気付いているがカーテンを締め切っていた。

（あんなに女の人を家に呼んで…上条さんは本当にそんな人だったの？）

佐天は上条のことを好き云々の前に、裏切られたことに対してシ
ョックを受けていた。

(あれから1時間…)

もういないだろうと思いい佐天は外を見た。しかし、そこにはす
ぬれで立っている上条がいた。

(うそ…なんで…)

上条が顔を上げると佐天と目が合った。その時、上条はゆっくり
と微笑んだ。その瞬間、佐天は目頭が熱くなるのを感じながらも、
傘を片手に走り出した。そして、傘を上条に差しながらそのまま上
条の胸に飛び込んだ。

「佐天？」

上条はそんな佐天に戸惑いながら声をかけた。

「何やってるんですか……1時間も雨の中……風邪じゃ済まないで
すよ……」

そんな佐天に上条は優しい笑みを浮かべ、佐天の頭に手を置いた。顔を上げた佐天の顔が濡れてたのは雨の性にしておいた。

「1時間も雨の中にいて何ともないなんてありえないんですけど…」

「上条さんは身体は丈夫なのです。弱いのは財布の中身だけです」

今上条は風呂場から話していた。佐天が強がる上条の服を（パンツ以外）脱がして風呂に連れて行った。

「それに佐天に誤解されたままだと嫌だからな」

佐天がドキツとしたとは知らずに、真実＋言い訳を話した。シスターはポニーテールから一時的に預かっただけで、そのポニーテールは金髪は知り合いで無理矢理上条の部屋に預けたらしい。巫女さんはポニーテールに頼まれて食事を作っただけと言った。

「…それじゃあ階段で介抱してくれた女性は誰ですか？」

「あいつは…何で来たんだろうな？」

「元カノとかですか？」

「違う！上条さんは今まで女性とお付き合いしたことはありません！ちなみに頭突き少女は何でもないクラスメートです！階段の少女は……本当に何しに来たんだろう？」 上条は何かあったのかとブツブツ呟いていた。そんな上条に佐天は、

「はあ…ならば着替えも乾いたことですし早く戻ったらどうですか？」

自分で部屋に上げといてこの言い方はないなあ、と思いながら佐天は言った。しかし上条は、

「いや、佐天に誤解だと信じてもらうのが先だ」

そう言い切った。もう着替え始めているのか、がさがたと音が聞こえる。

「何でそんなに私の誤解が解けるのにこだわるんですか？」

佐天がそう言うとはほぼ同時に上条が扉から出てきた。そして言った。

「佐天は俺にとって特別な存在だからだ」

そう言った上条の顔は真剣だった。

話すこと数十分。

そこには笑顔の二人がいた。

御坂は携帯と睨めっこしていた。

(うーん…やっぱり佐天さんに先に言った方がいいわよねえ…でも私の勘違いだったら…それか、もう付き合ってますだったら…っうわぁ!?)

御坂の携帯が鳴った。相手は佐天だった。あまりのタイミングに心を落ち着かせてから電話に出た。内容はこれから会ってもらえるかという内容だった。御坂としては断る理由がなかったのでOKを出した。しかし最後に佐天がこんなことを言っていた。

『私、上条さんに告白したら、「ありがとう。これからもよろしく」って言われちゃいました!』

その後、御坂は真っ白になった頭で佐天との待ち合わせ場所に向かった。

待ち合わせ場所に着くと佐天はいなかった。その変わりそこには上条当麻がいた。

「な、な、何であんたがここにいるのよ!！」

御坂の真っ白だった頭と顔に一気に色がついた。

「まあいいから座れよ。美琴」

上条の口から美琴と呼ばれた御坂は大人しく従った。その様子に上条はクツクツと笑った。

「な、なに笑ってんのよ!！」

「いや、佐天の言った通りだなと思ってよ?」

その言葉に御坂は顔を暗くさせた。

「…あんだ、佐天に告られたんだって？」

「あん？まあ…告白と言えば告白か」

「それで？あんたは何て言ったわけ？」

「何てって…ありがとう。こちらこそよろしくな。だったかな？」

「…それって、つまりOKしたってこと？」

「まあ…そういう表現もするか」

さつきから歯切れの悪い上条に御坂は勢いよく言った。

「あーもう！歯切れ悪い！！付き合ってたかって聞いてんの！！好きな相手にこんなこと言わせんなー！！」

その言葉に上条は目を丸くして、御坂はお湯が沸騰しそうなくらい顔を真っ赤にしていた。そして、小さな声で語り出した。

「そうよ…あんたが好きなのよ。ずっと…ずっと好きだったのよ」

上条は黙って御坂の話しを聞く。

「佐天さんとはずっと友達でいたいの。だから佐天さんがあんたのこと好きだって言ったら諦めるつもりだった…でも、気持ちを偽ることを止めたら…：…やっぱりあんたが好きなのよ」

御坂は自然と溢れてくる涙を手で覆った。すると上条はこう言った。

「美琴。なんで佐天は名字で、美琴は名前で呼ぶかわかるか？」

その言葉に御坂は顔を上げる。

「俺が好きなのは…美琴。お前だからだよ」

そう言った上条は柔らかい笑みを浮かべていた。もちろん御坂は信じられなかった。

「えっ、だ、だって佐天さんに…」

「『私、上条さんのこと好きだったんですよ？ま、それは過去形ですけどね？これからは友達でいてくれますか？』佐天にはこう言われた」

「そ、そんな…」

そして、上条は真剣な表情でこう言った。

「御坂美琴さん。好きです。僕と付き合ってください」

「…はい」

その夜には上条さんと御坂さんの両方から電話が来た。どちらもお礼と報告の電話だった。上条さんからは名前で呼んだら本当に大人しくなったと笑っていた。御坂さんは素敵なお礼だけでも今度すると言われたけど…。

その後、私は初春に電話した。今までのことを話して、ちょっとだけ泣いた。そして今日、初春が失恋デートを誘ってくれた。そんな待ち合わせ場所に向かっている途中に佐天は上条の言葉を思い出していた。

『あるガキと約束したんだ。御坂美琴と彼女の周りの世界を守るってな。だから俺が美琴の横にいる為には佐天も特別なんだよ。美琴にはいつも笑ってほしいからな』

その言葉を聞いて佐天は告白した。全て吹っ切れたと思ったからだ。しかし、改めて思い返してみると、佐天はため息を吐いた。

(全く…あんな台詞を平然と言われたら…佐天さんは初恋をもう少し引きずっちゃいますよ?)

佐天は思わず笑ってしまった。

「あ！佐天さん！」

「初春！私行きたいお店いっぱい調べてきたけど、どこから行くところか？もちろん初春のお財布で！」

「私のお財布事情知ってますよね!？」

泣きながら訴えてくる親友に、ほら行くよと引っ張って行く。今はまだこのままでいいと。でも…

(いつか御坂さんが羨ましが
る人見付けるもんね！)

後編（後書き）

作者は重大なミスを侵しました。上条さんの幻想殺しの話を忘れていました。実はラストは、『私の初恋の人は、LEVEEなんかよりもっと大切なことを教えてくれました』で締める予定だったのに…その件は読者の方の想像にお任せします。

あと、もう一本だけ書きます。短編集みたいな感じで『彼女達の真実』『初デート』『上条当麻の幸せor不幸』の三つを予定しています。何か書いて欲しい内容があれば、感想からどうぞ。完結しない今がチャンスですよ！

番外編（前書き）

「今日はお姉様はあの殿方と逢い引きですって」

「御坂さん楽しみにしていたみたいですからね」

「あの殿方と…あの殿方…あの…殿方…あの………類人猿がアアア
ア!!!」

「白井さん。顔、顔」

「初春！今日の任務は二人の監視ですよ！」

「私情を挟むのはマズインじゃないですか？」

「あの類人猿…少しでもお姉様に…」

「こんにちは…。って白井さんどうかしたの？」

「いえ。いたって普通です」

「ふーん…ところで白井さん。こつこつのはどうですか？」

（佐天さん、全部聞いてましたね）

「いいですねー」

「でしようー！任せてくださいー！」

「類人猿…今日を貴方の命日にしてくださいわ。そして傷心のお姉様を私が…グヘヘ」

「白井さん。顔、顔」

番外編

〈彼女達の真実〉

「土御門：貴方は何の為に私をここに？」

「いや、姉ちゃんに自分の立場を教えてあげたにや」

神崎は眉間にしわを作りながら土御門に問う。『緊急事態発生。至急上条宅に』というメールを受けたので急いで駆け付けてみるとこの様だ。

「ここはやっぱりもう一度墮天使エロメイドをやらないと勝ち目はないぜよ？」

「二度とやりません！！」

そう断言しながらも上条に気があるのも事実。『あれ』をやると本当に勝算が上がるのか……。いやいや！彼もさすがにあれは引いていた！……。しかし脳裏に焼き付いていたとも……。神崎が一人苦悩をしている横では、

「それで？あいさはなにしてきたの？」

「これ。たくさん作ったからおすそ分け」

鍋の中はカレーだった。インデックスは嬉しそうに鍋を受け取った。

(…それにしても、また新たなフラグ立てやがったな)

姫神が決して表面には出さず心の中で怒りをあらわにしている時、階段では…

(あ………いつちゃった)

上条に置いてかれた五和がおしぼり片手に呆然としていた。

「だから五和は甘いんだよ!」

「プリテウスの情報と『墮天使エロメイド変身セット』を渡してやったのに」

「ってか、今だにおしぼりってどんだけ奥手だよ!」

「…あんた達もいい加減にしなさいよね」

「今晚も五和は荒れそうだな」

「俺の酒がー!!」

本人差し置いて楽しそうな天草団でした。

く上条当麻の幸せく

上条と御坂が結ばれて今日は初デートだった。御坂は一睡もせず
に待ち合わせ1時間も前から来ていたとか。上条は寝坊して30分
遅れて来たとか。その後に一悶着あって1時間遅れでデート開始に
なった。最初は手を繋ぐことも恥ずかしい御坂のツンツンデレデ
レな態度に上条はそれはそれで楽しんでた。次第に慣れてきた御
坂も後半は上条をあちらこちらに連れ回していた。そんな二人から
笑顔が崩れることはなかった。

「ん？佐天から電話だ」

用件は渡したいものがあるから少し時間が欲しいとのことだった。
佐天には恋人になるきっかけを作ってくれた恩があるので、二人は
待ち合わせ場所向かった。

「あれ？御坂さんも一緒ってことはデートの最中でしたか？」

まあそんなとこだと上条は軽く答えた。御坂も気にしなくていいと言ってくれた。そして、佐天は本題である手に持っていた紙袋を上条に渡した。

「上条さんったら、こんな物忘れていくんだから…」

そう言った佐天は頬を赤らめ視線を下に下げている。そんな佐天を二人は不思議そうに見ていた。

「そ、それじゃあ私はこれで…」

早足で帰っていった佐天を見送った後、二人は紙袋の中を確認した。

！？

そこには男性用パンツが一枚入っていた。それを見て二人は顔を真っ赤にして上条は状況を把握した。

(そうだ。あの日佐天にパンツ一丁で風呂場に入れられて、しょうがないからパンツは手洗いしてその後佐天に乾燥機借りて…パンツだけだからすぐ乾くと思ってとりあえずノーパンのまんまで…)

そのまま帰ってしまった。そして上条は恐る恐る御坂の方を向いて見ると、怒りで身体から電撃がバチバチ鳴っていた。

「あんたって人は…」

「な、ちょ、ちょっと待て美琴。これにはだな…」

上条の弁解の前に御坂はキッと上条を一睨みして電撃を放った。

「待てって!!!これには事情があつてだな?」

「事情もクソもこんなシチュエーションになったのは事実だろうが
————!!!」

「今回のタイトルだと上条さんはハッピーエンドの筈では!?!」

こうしていつもの追いかっこが始まり、それを陰から見ている3人がいた。

「ま、これがあの2人には合ってるでしょ!」

「そうですね」

「あの類人猿…お姉様の愛の電撃をあんなに…」

「白井さん。顔、顔」

「ま、愛のムチって考えれば幸せか」

そんな中、公園中にその声は響き渡っていた。

「不幸だーーーー！！！！」

番外編（後書き）

次回も佐天さん中心で書きたいと思っています。

その前にコナンの方どうかしないと…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9791j/>

とある話

2010年10月10日18時42分発行